中級学習者の話す力を伸ばす授業設計および教材開発

―「話す600，700」の実践報告―

杉浦　千里

要　旨

本稿では、筑波大学留学生センター補講コース「話す600」「話す700」の授業設計と教材開発について報告する。中級レベルの学生の話す力を伸ばすためには、①相互に理解可能な話す力を身につける、②広く社会に興味関心を持ち、学生自ら情報収集を行う、③継続的な自己観察を行うことの３点が重要であると考える。その理念に基づいて行った授業設計、教材開発について述べる。更に、この教材を使ってどのように授業を進めたかを詳述し、そこから学生が何を学び取ったかについても述べたい。
【キーワード】中級　話す力　聞き手の役割　言い換え　社会問題　自己観察

The Course Design and Materials for Improving Intermediate Students' Speaking Ability : a report on the Speaking 600 and 700 courses

SUGIURA Chisato

【Abstract】This is a report about materials development for speaking J600 and J700 at the International Student Center of the University of Tsukuba. The author believes the following aspects to be effective for improving intermediate students' speaking abilities : 1) acquiring the speaking skills for the mutual understanding, 2) having interest in and autonomously collecting information about social phenomena, and 3) continuous self-observation. The course design and the materials are developed based on the author's ideas. In this paper the progress of the course using these materials are discussed in detail, and the students' reactions to these courses is also described.
【Keywords】intermediate, speaking ability, role of listener, social problems, self-observation

１．はじめに

筑波大学留学生センターでは中上級レベルの学習者を対象に「読む」「書く」「聞く」「話す」「文法」の技能別クラスが設置されている。本稿では「話す600」（中級中期）「話す700」（中級後期）の授業設計、教材開発について、2010年度の実践を中心に報告する。

筆者は2007年度３学期以降、現在の「話す700」に相当するクラスを担当し教材開発を進めてきたが、その後レベルが細分化されるに伴って「話す600」が新設されたため、「話す700」の前段階として教材開発を行った。授業設計や授業活動に連続性を持たせているため、本稿ではこの二つのレベルを合わせて述べることにする。

２．教材開発の理念 ―学生の抱える問題点、「中級」の難しさ―

2007年３学期の「話す700」では、教師が提示する日本のニュースや社会問題などについて討論を行い、最終発表では学生が選んだテーマで発表をし、討論をすることを目標としたが、それを達成できずに終わった。その一因として中級レベルの学生が抱える問題点が上げられる。

①「頼む、断る」などの機能を果たすための会話はできるが、一人である一定量の情報をわかりやすく話す力が弱い。

②日本のニュースや社会問題に関心が低く、それについての知識も乏しいため、意見を述べることができない。そのため、討論が成立しない。恋愛、結婚、アニメといった卑近なテーマでは意見を述べることができるが、抽象的な思考に関する討論に発展することが難しい。

③発表や討論を行う際の手順や、日本語での表現を知らない。

④発表や討論で発言する場合、何をどう話すかに集中するため、また、用意した原稿にとらわれるため、聞き手の理解の程度に注意を払うことができない。そのため、一方的な発表、発言になりがちである。

⑤発表を聞く側は、聞き手としての役割が意識されておらず、わからない事柄をそのまま聞き流してしまう。そのため内容に関する発展的な質問が作れず、質疑応答が成立しない。

⑥これまで学んできた文法、語彙、表現等の既習知識が、その時、話そうとしていることと結びつかない。

⑦発言の途中で知らない語彙があるとそこで中断してしまう。発音の悪さから通じない場合も中断してしまう。「言葉の言い換え」「説明」をすることができない、または、それが有効であるという発想がない。

更に「中級」レベル特有の問題点も重なってくる。このレベルの難しさはまさに「中級」という点にある。いわゆる「初級」レベルでは概ね学ぶべき事柄が明示され、学生も教師

もそれに沿って進んでいくことができる。「上級」レベルになれば自己表現力も備わり、個々の必要に応じた学習を選び取ることができる。しかし、その中間にある「中級」レベルでは、何をどう学べばよいのか明らかでなく、学生が大いに迷う時期である。また、自分の日本語力の成長が感じられにくくなるため不安を覚え、学習を諦める時期でもある。そのため、「話す600，700」クラスでは「発表ができる」「討論ができる」などの目に見えやすい目標を掲げるだけでなく「継続的な自己観察」を授業に組み込む必要を感じた。

これらの反省点を踏まえ、教材開発の理念として、次の３点を掲げた。

①相互に理解可能な話す力を身につける

「わかりやすく話す技術」「聞き手への配慮」「書くことによる思考の整理」

②広く社会に興味関心を持ち、学生自ら情報収集を行う

③継続的な自己観察を行う

①には３つの側面がある。語彙や表現の知識不足によってうまく話せない事柄を「ことばの言い換え」や「説明」で伝えることに着目した「わかりやすく話す技術」、聞き手の理解に沿って話を進める「聞き手への配慮」、キーワードの提示やレジュメの作成を通して行う「書くことによる思考の整理」である。②中級以降で要求される討論をするためには、社会全般に関する豊富な情報とそれについての思考に裏打ちされた個々の意見を持つことが不可欠である。また、テーマを教師から与えられるのではなく、学生自らそれを選び取る力を養成する必要がある。③自己観察の方法として２つの流れを考えた。１つは、学期初めの自己分析と課題設定、中間期での確認と修正、学期最後の最終レポートでの目的達成の検証というものであり、もう１つは毎回の授業の最後に「今日の私」という内省メモを書くことである。中間、最終レポートを作成する際にこのメモを読み直す課題を組み込み、２つの流れが有機的な循環となるようにした。

３．「話す600，700」クラスの概要と目標

筑波大学留学生センター補講コースに設置されている中上級レベルの「話す」クラスは500～900の５レベルがあり、筆者が担当している「話す600」は中級中期、「話す700」は中級後期にあたる。学生数は学期によって異なるが15名から25名程度で、国籍は中国、韓国、エジプト、ロシア、インドネシア等、多岐にわたる。20代から30代の学生が中心である。１回75分の授業を週1回行い、10週10回で１つの学期が終了する。年３学期制を取っている。

教材は２．に掲げた理念に基づいて筆者が作成したものを使用してきた。2011年度からは「話す600」「話す700」の教材を、『日本語で発信』[1]というタイトルで１つにまとめたものを使用している。

この「話す」コース全体としての最終目標は設定されていないが、筆者は「大学生活、

研究活動の場で求められる発表、質疑応答、討論が十分に行える」ことを最終目標とし、「話す700」ではそこに到達するための前段階、「話す600」ではさらにもう一段階下げた目標設定を行った。

「600話す」の目標は次の通りである。

①発表のメモを使って、わかりやすい発表ができる

②社会性のあるテーマについて、簡単な日本語で話すことができる

③広く社会に興味・関心を持つ

④相互に理解可能な質疑応答ができる

⑤「話す」力を伸ばすための具体的な目標を自分で設定し、実施後、自己評価できる

⑥日本語で簡単なインタビューができる。その結果を他の人に伝えることができる

「700話す」の目標は次の通りである。

①レジュメを効果的に使い、大学生活で必要とされる発表ができる

②社会性のあるテーマについて討論ができる

③広く社会状況に興味・関心を持ち、日本語で情報が取れる

④相手に配慮した相互に理解可能なコミュニケーションができる（相手が知らないことをわかりやすい日本語で説明できる。自分がわからないことを表明し、解決できる）

⑤「話す」力を伸ばすための具体的な目標を自分で設定し、実施後、自己評価できる

４．授業設計と授業活動

「話す600」と「話す700」の授業設計の基本構造は同一である。全10回の授業の前半６回で発表、質疑応答、討論の練習を行う。同時に宿題としてインタビューを行う、自分でニュースリソースにあたるなどして、社会全般についての知識を蓄え、討論の材料や発表のテーマ探しに役立てる。後半の４回ではグループ発表を行う。発表や質疑応答、討論の質を高めることと同程度に、終了後の検討会に時間をかけ、良い発表・討論をするためには何が必要かをクラス全体で考え、意識化させることに重きを置いた。

４．１「話す600」の授業活動

表１に示した授業内容に沿って授業活動を詳述する。

表１　「話す600」授業内容

回	内容	資料	今日の宿題	注意点
1	1.オリエンテーション 2.全員インタビュー 3.インタビュー練習 4.「今日の私」	【資料1】 インタビューの日本語	①インタビューA 日本人ではない人にインタビュー：日本人の友達がいますか。日本人の行動を見て不思議だなと思うことは何ですか等。	
2	1.ミニ発表 Step1 発表メモ→発表 Step2 上手に質問！ (Step3 グループでの話し合い) 2.「今日の私」		①言い換え練習 ②インタビューB ③発表メモ	発表するときに大切なこと、発表を聞くときに大切なこと
3	1.言葉の言い換え練習 「私の国にあるけれど、日本にないもの」 2.ミニ発表「日本人へのインタビュー」 Step1 上手に質問！ Step2 グループでの話し合い 3.「今日の私」		①日本人へのインタビュー：外国人の友達がいますか。外国人の行動を見て不思議だなと思うことがありますか。 ②発表メモ ③言い換え練習	
4	1.言葉の言い換え練習 「日本にあるけれど、私の国にないもの」 2.ミニ発表 「日本人へのインタビュー」 Step1 上手に質問！ Step2 上手に質問＋α Step3 グループでの話し合い 3.「今日の私」	【資料2】 意見を言うときの日本語	①日本人へのインタビュー：最近の気になるニュースについて教えてください等 ②発表メモ	じょうずに意見を言うために ・相手の意見を短くして繰り返す ・相手に賛成する点を言ってから、反対意見を言う
5	1.言葉の言い換え練習 「ことばBANK：ニュースのことば」 2.ミニ発表 「日本人へのインタビュー」 Step1 質疑応答 Step2 グループでの話し合い 3.「今日の私」		①グループ発表のアイディア	
6	1.「今日の私」中間確認 2. 発表準備 ・評価表作成 ・聞き手の宿題 3.司会の言葉，発表の言葉 4.「今日の私」	【資料3】 司会の日本語 【資料4】 発表の日本語	①グループ発表のレジュメ ②グループごとの準備	・発表する人の仕事、聞き手の仕事 ・評価表の作り方 ・聞き手の宿題について
7	1.グループ発表と質疑応答１回目 聞き手の宿題 2.「今日の私」		同上	
8	1.グループ発表と質疑応答２回目 聞き手の宿題 2.「今日の私」		同上	
9	1.グループ発表と質疑応答３回目 聞き手の宿題 2.「今日の私」		同上	
10	グループ発表と質疑応答４回目 まとめ，レジュメの直し， 振り返り同上		同上 最終レポート提出	

１回目：「話す」活動を円滑に進めるためには学生相互の良好な関係が非常に重要になるので、初回では相互理解を深める活動を重視した。「全員インタビュー」では、クラスメイト総当たりで１人１分程度、名前、出身、専門、趣味などをインタビューし合う。これを行うことで緊張感もほぐれ、同時にその日の学習内容であるインタビュー表現の準備にもなる。その後、【資料１.インタビューの日本語】[2]を使って練習し、宿題として日本人でない人にインタビューを行い、２回目の授業にその結果を報告する。授業外でのインタビュー活動に慣れるために、同国人に母語でインタビューすることから始まり、徐々に日本人に日本語を使ってインタビューをするというように段階的に課題を設定した。

「今日の私」は毎回授業終了時に学生がその日の授業を振り返って「よくできたこと」「よくできなかったこと」「考えたこと、感じたこと」の３点について５分程度で書いて提出し、筆者がコメントを書いて返却するもので、学期を通じて行った。

２回目：「ミニ発表」では前回の宿題であったインタビューの結果を４人程度の小グループで話し合い、その内容を３分程度にまとめて全体に発表する。小グループでの話し合いに入る前に各自インタビュー結果について「発表用のメモ」に箇条書きにしてまとめ、それを見せながら話し合う。事前にこれを行うことで話すべきポイントを整理し、簡潔に話すことを意識できるようになる。また、発音等の問題によって音声だけでは理解しにくい内容も、文字情報の助けによって理解しやすくなるという効果もある。

「上手に質問」では質疑応答を円滑に進めるために、カードを利用した視覚に訴える練習を行った。このレベルの学生は他者の発言を理解しつつ、自身の考えと照らし合わせて質問を考えることが難しい。また自分の質問内容を日本語で組み立てるのに必死で相手の発言への注意がおろそかになりがちである。それを改善するための練習方法である。小グループの人数分の色別カードを10枚ずつ用意し、各自に一色（10枚）を持たせる。最初の発言者が自分のカードを１枚机の上に置いて発言する。それに関連する質問をしたい人は自分のカードをその上に置いて質問する。答えるときもその上に１枚自分のカードを置いて答える。更に他の人がそれに関連した質問をするときも、自分のカードを重ねてから発言する。関連しない発言をする場合は、自分のカードを机の別の場所に置いてから発言する。このようにすると、発言を関連付けることを意識できるようになる。また、発言回数の多寡も一目でわかり、自己評価しやすくなる。

３回目：「ことばの言い換え練習」では語彙量の不足を補ってわかりやすく話す力を伸ばすための練習を行った。「私の国にはあるけれど日本にないもの」を他国の人に説明する。自分自身はよく知っているが他者は知らないものを、既習の語彙や表現を使って説明する練習になる。辞書で調べた語彙や漢字語を多用すると、聞き手から即座に説明を要求され

る。ドイツのくるみ割り人形、カザフスタンの揺り籠、韓国の徴兵制度などが紹介されたが、それがいったい何なのか、どのように使うのかなど、興味を掻き立てられたようで質疑応答も活発に行われた。

インタビュー宿題は日本人に最近の気になるニュースについて聞くというものである。このレベルでは日本語の新聞記事やニュースを見て理解することも、また、多量の情報の中から適切なものを選び取ることも難しいが、日本人にインタビューすることで取捨選択を委ね、ニュースの概要を理解することができ、背景知識についても説明を求めることができる。更にインタビュー課題を通じて知り合いを増やし、教室外での日本語環境を広げることと、最終発表のテーマ探しに役立つことも狙いとしている。４回目でも同様のインタビューを課し、最初のインタビューでうまくできなかったことをもう一度試す機会を設けた。

４回目：「ことばの言い換え練習」では「日本にあるけれど私の国にないもの」をテーマに行った。「こたつ」「合格祈願エンピツ」「日本式の細かい手続き」などが紹介された。言い換え練習に加えて、神社や手続きに見る日本人の国民性にまで話が及び、一段階深いテーマでの質疑応答に発展することができた。

ミニ発表では前回の宿題であった最近の気になるニュースについて小グループで話し合い、その中から面白いものを１つ選んで全員の前で発表と質疑応答をするという活動を行った。サッカー日本代表ワールドカップ出場、芸能人の結婚などの表面的なニュースを聞いてくる学生もいるが、この種のニュースでは発展性がなく選ばれにくいことに気づき、次回からは発展性のあるテーマが出るまでインタビューを続けるようになった。

５回目：本教材には、説明しにくかった言葉、聞いてもわからなかった言葉を毎回メモする「ことばBANK」という欄を設けてあり、ここではそこから選んで、どのように言い換えたら理解しやすいかをクラス全体で考えた。例えば「聴診器」「中立」という言葉を使って、聞き手から質問されたら、「聴診器は医者が使うもの、患者の体の中の音を聞くとき使うものです」、「中立というのは、敵でも味方でもないことです」といったやさしい日本語に言い換えれば聞き手が聞いて理解できることを確認し、以前の学生の発表で出された伝えにくい語彙（手錠、油田、普及する、大気汚染等）を言い換える練習を行った。

６回目：「今日の私」を読み返し、最終発表で何を目指すか、自己目標を３点挙げる。最終発表は３～４人のグループ発表になるので、その準備を進める。発表する際にはメンバー、テーマ、内容、みんなと話し合いたいこと（討論ポイントの意識化）、聞き手の宿題（事前に聞き手にも準備させる）を明記した「発表メモ」と、評価表を作成して配ることが課

せられる。評価項目はそれぞれの自己目標を反映させて、グループごとに独自のものを作る。「聞き手をよく見たか」「声は聞きやすかったか」「内容はわかりやすかったか、言葉の説明は十分だったか」等の項目が上げられた。

７～10回目：最終発表を行った。４～５人のグループで20分程度の発表を行い、その後10分程度の質疑応答を行う。終了後に聞き手は評価表を記入し、それを参考にしながら全体で20分程度の検討会を行う。検討会では発表の内容について、また、発表及び質疑応答の進め方についての両面から検討した。これなら75分の授業時間で十分収まるはずなのだが、最初のグループは挨拶や声、視線の使い方のやり直しや、言葉の説明が分かりにくい、資料の不足、発表の構成が考えられていないなどの点をその都度筆者に指摘されて中断するため、倍以上の時間がかかることもある。検討会では「うまくできたこと」と「うまくできなかったこと」を検証し、それぞれを模造紙に書き溜めていって、毎回発表の前に全体で確認することを励行した。これを４回重ねることで改善すべき点を意識する態度が身についていく。

最終発表のテーマは、オタク文化、過労死、日本人と外国人の違うこと、日本と中国の関係の問題、日本人の上下関係、不思議な日本人、世界の自然災害、職業と就職等であった。

最終レポートは「日本語を話すとき・聞くとき大切なこと」というテーマでA4サイズ１枚程度で書く。「今日の私」を読み直し、学期初めと比較して「何ができるようになったか、ならなかったか」「それはなぜか」「どうすればできるようになるか」について書く。

４．２　「話す700」の授業活動

表２に示した授業内容に沿って授業活動を詳述する。

表２　「話す700」授業内容

月日	内容	資料	今日の宿題
1	オリエンテーション 相互理解活動「私の世界地図」 ミニ討論準備 ・「今日の私」		①「私の日本語問題」を書く
2	ミニ討論1　「私の日本語問題」 宿題報告→討論 練習インタビュー「最近の気になるニュース・社会問題」 ・「今日の私」	【資料1】 インタビューの日本語	①日本人へのインタビュー ②結果を箇条書きにする。
3	練習意見を言う・意見を聞く 練習発表の日本語 ミニ討論２　「最近の気になるニュース・社会問題」 インタビュー報告→討論 ・「今日の私」	【資料2】 意見を言う・聞く 【資料4】 発表の日本語	①自分でニュースを探す ②結果を箇条書きにする。

4	練習言葉の言い換え 「困ったときは簡単日本語」 練習司会の日本語 ミニ討論３　「私が最近、気になるニュース」 宿題報告→討論 グループ発表と討論の準備　グループ分け ・「今日の私」	【資料３】 司会の日本語	
5	練習言葉の言い換え 「困ったときは簡単日本語」 練習グラフの説明 発表準備 ・「今日の私」	【資料４】 グラフの説明	①グループ発表のレジュメ ②グループごとの準備
6	グループ発表と討論１ 「みんなと考えたい疑問に思うこと」 「みんなと考えたい社会問題」 ・「今日の私」		①グループ発表のレジュメ ②グループごとの準備
7	グループ発表と討論２ ・「今日の私」		①グループ発表のレジュメ ②グループごとの準備
8	グループ発表と討論３ ・「今日の私」		①グループ発表のレジュメ ②グループごとの準備
9	グループ発表と討論４ ・「今日の私」		①グループごとの準備 ②最終レポート説明
10	まとめ レジュメの直し　振り返り		最終レポート

１回目：初回の相互理解活動として「私の世界地図」という活動を行った。A3サイズの紙とペンを準備する。ペアを作って、まず紙の中央に相手の顔と名前を書く。相手の専門、家族、アルバイトなど質問しながらキーワードを書いていく。日本語に関係すること（日本語でブログを書いている、サークルに入って日本人の友人と交流している等）も書く。相互に質問して書き終えたら紙を交換する。紙を持って立ち上がり、できればクラスメイト全員と紙を見せながら話す。絵を描くことで初回の緊張が和らぎ、文字情報に助けられるので初対面でも話す事柄に困らないといった利点があり、時間を過ぎても話しやまないほど打ち解けて話すことができる。

「話す700」レベルでは、「話す600」で学んだ発表、質疑応答の技術を踏まえ、更に討論を十全に行うことを目標に掲げている。「ミニ討論準備」はそのための練習である。「私の日本語問題」というテーマで「普段、誰と日本語で話しますか」「日本語で誰と何について話したいですか」「日本語で話すとき困るのはどんなことですか」「学期末までにできる小さい具体的な目標を考えよう」についてペアで話し、宿題として箇条書きでシートを埋めてくる。これは２回目の討論練習の材料になり、更に自己観察、目標設定をも兼ねている。

２回目：「ミニ討論」では、前回の宿題「私の日本語問題」を使って４人の小グループで

討論を行う。その後、学生１人を司会に立て、討論で出された印象的な意見を発表する。その後、時間があれば、筆者が準備したテーマ「世の中からパスポートはなくせるか、自国で暮らす方が幸せか、日本で暮らす方が幸せか、日本人はなぜはっきり言わないのか等」から一つを選んで討論の練習を行う。この時、他者の意見に自分の意見を重ねることができない場合は、「話す600」で行ったカードを使って練習するのも効果的である。

３回目：「最近の気になるニュース・社会問題」についてのインタビュー準備を行った。「話す600」を履修せずに「話す700」に入ってくる学生も多いので、インタビューで必要な表現の確認も兼ねて上記のテーマでペアでインタビューをし合い、その結果を「発表メモ」として箇条書きでまとめる練習をする。この日の宿題は日本人に「最近の気になるニュース・社会問題」についてインタビューし、その結果と自身の考察を箇条書きにして「発表メモ」を作成してくることとなっている。

４回目：前回の宿題を材料として意見交換と討論を行う。同じ活動を２回することで、１回目に気付いた問題点をもう一度練習することができる。

５回目：これまで書き溜めた「ことばBANK」を見直して、説明しにくい言葉をどうしたらわかりやすく日本語で話すことができるかを全員で考える。ここでは書き言葉と話し言葉の使い分けと、漢語を和語に直す技術を学ぶ。これを行うことで、ニュースの見出しをそのまま話して（読んで）しまうことの問題点に気づきやすくなる。例えば「地球温暖化による海面の上昇」とそのまま話しても、発音の悪さや聞き手の語彙不足によって理解してもらえない場合は、「地球温暖化による海面の上昇というのは、地球の温度が上がると氷が溶けます。氷が溶けると海の水が増えて、今まで海じゃなかったところが海になることです」と言葉を言い換えて説明すれば理解してもらえることを解説し、「国際結婚」「異文化適応」「検閲制度」などを例に出してクラス全員で言い換えのアイディアを出し合う練習を行った。

　データの扱い方の入門として、グラフの説明も行う。教材にある、「私の日本語の力についての変化」を折れ線グラフで表したものと、現在の関心事を割合で表す「私の頭の中」と題した円グラフを説明するモデル文を読んで、グラフを説明するための表現や語彙を学んだ後、同じテーマで自分自身に関して２つのグラフを作成し、ペアで練習する。グラフの説明を苦手に感じたり、環境問題などの一般的な事象のデータに関心のない学生でも、自分自身に関する話題であるためか、楽しんで練習することができる。

６回目：グループ発表と討論の準備を進める。４～５人のグループを作り、これまでのイ

ンタビューで得た情報等を基に発表テーマを決め、準備作業を進める。「みんなと考えたい、疑問に思うこと」「みんなと考えたい社会問題」というテーマに沿って、具体的なトピックを決め、情報を集め、発表後の討論のポイントを絞る。毎回の宿題を確実にこなしてきた学生は、情報量も、それに関しての問題意識もあるので、発表トピックを選ぶことにさほど苦労はしない。

７～10回：４回にわたってグループ発表と討論を行う。わかりやすい発表をすることと、その後で活発な討論を行うことを目指す。手順は次の通りである。発表グループが20分程度の発表を行う。それに続く討論では、まず、聞き手に３～４人の小グループを作ってもらい、その中に発表グループのメンバーが１人ずつ入って、小グループでの討論を20分程度行う。その後、各グループの聞き手の１人が全体に向けて討論の内容を紹介し、それを材料として全体での討論を行う。このように２段構えの討論を行うことで、多人数の前では気後れして質問できない学生も発表者に質問しやすくなる。また、小グループ内での発言から多人数の前で発言へと段階を追って練習することで発言することへの自信を持つこともできるようだ。

発表の際にはレジュメを配布する。レジュメには「みんなと考えたいこと」を２点あげることが求められる。これを予め考えることで自分たちの考えた発表内容が、討論の材料になり得るものかどうかを確かめることができる。

最後に全体で発表についての検討会を行う。聞き手から発表と討論についてのよかった点と改善点をコメントする。ここで出された改善点は次の発表グループの努力目標になり、全員が授業終了時に書く「今日の私」にも書き留められる。これを４回繰り返すことで、筆者が２節で挙げた「学生が抱える問題点」に対する改善点をクラス全体で発見し、共有することができる。

10回のクラス終了後に「私の日本語の変化～いい発表と討論をするために大切なこと」というテーマで最終レポートを提出する。その際、１回目に書いた「私の日本語問題」で設定した課題が達成できたか確かめることと、毎回の振り返り「今日の私」を再読して内省することが求められる。

５．授業活動の特色

授業活動の特色として、次の７点が上げられる。

①活動の難易度が段階を追っており、１つの活動を数回行う

小グループでのミニ発表・討論から始まり、最終発表まで段階を追って少しずつ練習する。１つの活動を何回かにわたって繰り返し行うことで、気づきを促し、定着を図る。討論のテーマも身近で具体的なことから、徐々に社会的・抽象的なものに発展するように配

置した。

②与えられるのではなく自ら探し当てる

討論の練習を行う場合、あらかじめ教師が用意したテーマや資料を使うことが一般的だが、本クラスでは学生が自分でそれを見つけ、クラスに持ち込むことを取り入れた。受験勉強などの受動的な学習をしてきた学生に、大学生として能動的に学ぶ姿勢を身につけさせたいためである。卒論などを書く際のテーマを選択する力にも結び付くものである。

③授業内容と学生の現実を結び、全体像を提示する

授業を授業として終わらせるのではなく、学生の現実の生活や将来の展望と、授業活動との結びつきを意識させる必要がある。授業中にも機会があるごとに、授業活動の意図を明確に説明することを心がけた。また、本クラスでの授業活動や宿題はそれを意識して作成し、全ての回の活動を一冊の教材にまとめて授業の全体像を見通せるようにした。

④継続的な自己観察が組み込まれており、個だけでなく共有する

２節で述べた「中級」の苦しい時期を学生が乗り越えて成長するためには、継続的な自己観察とそれによる自己課題の設定、その検証と再設定という循環が欠かせない。そのため振り返りメモである「今日の私」や最終レポートを組み込み、成績評価にも反映させた。また、初回の「私の日本語問題」についての討論などでクラスメイトと意見交換することで共感し合ったり、改善方法について多角的な視点を持つことができるようだ。

⑤聞き手の役割の意識化

中級レベルの学生の質疑応答、討論が表層のレベルで終わってしまう一因に、聞き手の役割の重要性が認識されていないことが上げられる。学生だけでなく、教師にもその認識が低かった。その改善のため「わからないことをわからないと表明する練習」「相手の話のポイントをまとめて投げ返す練習」「発表を聞きながら質問を作る練習」などをさせる。

最終発表時には、質問の質を上げるために「聞き手の宿題」を提示させた。これは、発表担当者が事前にテーマに関する宿題を聞き手に出し、聞き手はそれについて調べておき、当日、より良い質問をするという活動である。これらを通して、上手に話すためには良い聞き手になることが大切だという意識が徐々に定着した。

⑥話すことと書くことの連動による思考の構造化の練習

話すことが苦手という学生はその理由として、何をどの順番で話せばわかりやすく話せるかが分からないことを挙げる。教師の質問に誘導されて会話が成立してしまう、受動的な学習を続けてきた結果であろう。そこで、「話す600」のミニ発表の際にはキーワードを３つあげることで事前に話すポイントと順番を明確にすること、最終発表ではメモ（レジュメの一段階前のもの）を作成しながら発表の構成を整えて話す練習を行った。「話す700」では一歩進んでグループで相談しながらレジュメを作成し、それに基づいて発表を行った。これによって一つのテーマについて複眼的思考を経て構成を整える能力が養われ

る。更に、メモやレジュメには箇条書きで書き、それを基に話すときには「です・ます」体や敬語を使って話すことが要求されるので、書き言葉と話し言葉のスタイルチェンジの練習としても有効である。

⑦「ことばの言い換え」「説明」の重視

学生が自分でテーマを探すようになると、自分の日本語運用力を越えたものを表現しなければならなくなる。そのギャップを埋めて聞き手に理解可能な発表を行うためには、「言葉の言い換え」「説明」の発想と技術が重要になるので、数回にわたって練習を組み込んだ。

5.1　授業中に教師が行っていること

教材には明示されていないが、教育効果を上げるために、筆者が意識的に行っている項目について述べたい。

①授業を楽しむための努力

「話す」能力を向上させるためは、学生がこの授業を楽しんで、たくさん話したいと思うことが大前提である。そのためには筆者と学生、学生同士の良好な関係が不可欠なのでその点には注意を払った。授業内容が学生の現実や将来と関連していて、知的好奇心を満たすものであることと、何らかの問題が持ち上がった際にはクラス全体で協議して納得してから進めることの2点に留意した。

②訂正方法

発した瞬間から消えていく「話す」力を向上させるためには、その時、その場でのフィードバックが最善だと、現段階では考えている。これまで、ビデオに撮って事後に訂正をする方法を行ったこともあるが、ビデオ撮りが頻繁には行えないこと、タイムラグが生じてしまうこと、教師の助力なしで学生が自分のビデオを見ても気づきに限界があることなどから、学生の発言を中断してでも必要な訂正はその場で行うという方法に変更した。事前にこのような訂正スタイルを望むか否かの意思確認を学生にしてから行った。

③体の使い方のトレーニング

話し手に伝わる発表をするためには、体の使い方を十分にコントロールする必要がある。話すことに集中すると、それが疎かになるので初回の発表練習からトレーニングを行った。まっすぐに立つ、髪をいじらない、適切に視線を使う（右端、中央、左端の3点を均等に見る）、声の強弱、高低を使い分けて印象的に話す方法、資料を示すときの体の向き、表情（笑いすぎる、厳しすぎるなど文化圏によって微笑に対する価値判断が異なるため）等をトレーニングした。

④時事問題を扱う危険性と可能性

ニュースを話材とすると、時に政治制度、思想信条、宗教に関わることが討論のトピッ

クとして挙げられることがある。インターネットの検閲制度を取り上げた時も、オーストラリアの学生と中国の学生との間で意見が衝突したことがあった。領土問題や歴史認識などになれば尚更である。が、現実の世界に生きている人間が興味を持つものとしては避けて通れないテーマなので、時事問題を扱う前には、教育のある理性的な大人として授業に参加してほしいと学生に協力を求め、了解を取ってから行った。

⑤「今日の私」教師からのコメントの重要性

「今日の私」には毎回全員分にコメントをつけて返却した。多人数の授業では発言できなかったことや個人的な感想などをここに書き、それについて筆者からコメントをもらうことで個別の回路を設けることができ、個々の学生と筆者との良好な人間関係を作る一助となる。

5．2　学生の反応

「話す600、700」の最終レポートで50人（男20人、女30人）[3] の学生が述べたことを筆者が項目別にまとめたものを記す。最終レポートのテーマは、「話す600」が「日本語を話すとき、聞くときに大切なこと」、「話す700」は「いい発表と討論をするために大切なこと」であった。

毎回の授業や自己観察を通して学生が何に気づき、レポートに自ら書くことができるかを見た。すなわち、10回の授業で行った教師からのin-putのうち、学生が何をin-takeしたのかを見ることができる。ここには筆者が授業設計当初に重要と考えたものがほとんど挙げられている。逆に言えば、中級の「話す」授業を設計する際の重要項目リストであるともいえる。ただし、以下はクラス全体としての気づきであり、各人が同様、同程度に気づいたものではない。

①社会についての知識

・毎日ニュースを見る、新聞（ネットでも）を読む。社会情勢を知らないと話題を見つけられないし、ディスカッションもできない。広く社会情勢について知っていると、相手の話が理解しやすい。
・自分の専門について日本語で説明できる。
・日本のドラマやアニメを見て、発音や表現を知る。
・レジュメの書き方を知っている。

②言語知識・運用能力

・言葉の言い換え、説明の方法を知っている。漢語を和語で説明するとき、基本的な文法を復習する機会になる。
・「例えば」と例を挙げて説明することができる。
・相手に合わせた適切なスピーチスタイルを選択し、使用する。

・話し言葉と書き言葉の間を自由に行き来ができる。
・適切な文末を選択し、使用できる。習った文末表現を思い出して使う練習になる。動詞の活用を正確に使うように意識する。
・文が長すぎない、短すぎない。
・文法の正確さ。自動詞と他動詞を正確に使う。助詞を間違えずに使う。

③思考力とコミュニケーション力

●話し手として

・発表の時メモを見ながら話すと、緊張していても落ち着いて話せる。
・聞き手が興味を持つトピックを選ぶことができる。
・適切なキーワードやキーセンテンスが書ける、それを使ってわかりやすく話せる。
・良い構成のレジュメが書ける、それを作るために事前によく考える。
・わかりやすい発音をこころがける。
・相手を見る。
・相手の理解の度合いに応じて、話し方を変える。
・適切な音量、高さの声で話せる。
・基本的なマナー（テクニック）を知っている、いい印象で話せる（立ち方、手の位置、声、表情など）。
・発表するための日本語の表現を知っている。発表の流れを説明する、何について話すか説明してから、内容を話す。
・その場での質問に答えられる。
・質問してくれたことに対してお礼が言える。
・質問の趣旨を確認できる。「〇〇ということですね」という表現が使える。
・自分の発表に関して、前もって質問を予測する。
・相手の意見に関連した意見を述べることができる。
・一つの意見を深めたり、更に発展させることができる。
・図表などのデーターを正確に説明できる、説明の表現を知っている。
・データーの出典を明らかにできる。
・事実と意見を分けて話すことができる。
・聞き手に問いかけをしながら話を進められる。「〇〇についてご存知ですか、ここまでよろしいでしょうか」などの表現が使える。
・決められた時間を意識して話す。

●聞き手として

・質問を考えながら聞く。相手の話をよく聞きながら、同時に自分の意見を考える。相手の話に疑問を持ちながら聞くことも大切。

・わからないことは聞き返す。
・わからないときは表情でそれを話し手に伝える。
・相手を見る。何を言いたいのか考えながら聞く。話し手の表情や動作にも注意して聞く。
・話を聞き終えた後、要点を短くまとめて繰り返すことができる。
・適切な相槌を使用する。母語の音を使わずに日本語の相槌の音を使う。
・肯定的なコメントをしてから、質問や批判ができる。
●司会として
・司会の表現を知っている。
・発言内容の要点を短くまとめて繰り返すことができる。
・ディスカッションのデザインができる。誰の意見を取り上げ、どの方向にディスカッションを進めていくか決めることができる。
●グループ発表のメンバーとして
・相談する時間を作る。
・全員でよく話し合う。よいアイディアを出せる。
・十分に資料を集める。発表時間に合わせて不要なものは捨てる。
・発表前にリハーサルをする。その結果を見て発表を作り直す。
④日本語環境の力
・日本人の友人や恋人がいる。カジュアルスタイルの日本語を使用する機会を増やす。
・日本人の指導教官、上司などがいる。フォーマルスタイル（敬語を含む）の日本語を使用する場面を増やす。
・ゼミで日本語をよく使う。
・最近のニュースや社会問題についてディスカッションをする相手がいる。インタビューの宿題を通して日本語で深く話すことができ、日本人の友人を作ることができた。
・誤用を指摘してくれる人がいる
⑤自己観察力
・自分の口癖を知っている。
・日本語で発言しようと努力する。間違えてもいいから話そうと思う勇気を持つ。
・自分の変化に注意する。日記など記録を残す。
・自分の問題点を把握し、具体的な改善方法、練習方法が考えられる。
・話しながら、言葉の正確さ（文法、表現、語彙など）を意識する。
⑥感情についての言及
学生の記述（原文のまま）を挙げる。
「授業の時、私はあまり積極的ではなかった。頭の中の文章を日本語ではすらすら話せなかったからである。」

「皆の前で話すのが怖くて、緊張したので、言葉に迷ってしまった。更に、緊張のせいで声が振動して、小さかったので、聞き手に聞こえなくて分かりにくかった。」

「授業での発言が不足している。会話能力も原因の一つだが、自分の性格に関わることも原因の一つだ。」

「知らない単語とか表現が耳に入ると、脳はその場で停止してずっとその意味を探す。こうすると、後の話は少しも聞こえない。知らない部分にとらわれず、知っているものをだんだん聞くと、知らなかった言葉の意味を推測することもできるし、全体の聞き取りも出きるようになる」

「日本語で話すのは苦手である」

上記のように、筆者の意図した授業の目標に沿った気づきへの言及が多かったが、次のようなコメントもある。「自分の言いたいことが表せないときが多いです。言葉が少ないからです」「話すとき一番大切なことは正しい発音と文法です」。これらを乗り越えて「話す力」を伸ばすための授業を行ってきたはずなのだが、意図をくみ取ってくれない学生も存在する。

6．今後の課題

次の4点を今後の課題としたい。

①聞き手の役割の強化―質問力を上げる―

これまで行ってきた授業活動によって、話し手としてある一定のまとまった事柄を伝える「話す力」を伸ばすことはできたと思われる。次は聞き手の役割を強化する練習方法を考えたい。中級の学習者にとって、相手の話や発表を聞いて理解しながら、同時に自分の考えと照らし合わせて質問を考えるのは非常に難しいが、これなしに深い討論に進むことはできない。これを改善するための具体的で、かつ、「話す600」のカードを使った練習のような視覚に訴える練習方法を考えたい。

②資料の扱い方

客観的な資料に基づく発表や討論を行うために、資料の収集や用い方の練習が必要になる。これまでは「話す800」以上で扱うという取り決めだったので、あまり多くを行わなかったが、その前段階としての具体的な練習方法を追加する必要がある。

③討論をデザインする立場としての司会の役割

「話す600」レベルでは形式的で簡単な司会に終始するが、「話す700」ではもう一段上の司会を目指したい。提出された意見のうち、どれを取り上げ、どの方向に話しを進めるかを司会が判断し、討論をデザインしていく力を養成する練習を開発したい。

④レベル間の調整、他技能との連携

「話す500」から「話す900」までのコース全体を見渡してみると、テーマや活動内容の

難易度が逆転しているなど、まだまだ未整備な点が多く、更に調整を行うことが必要である。また、本コースの最終ゴールである「話す900」の終了時レベルを明確に設定する議論もなされていないので、それを行うことが喫緊の課題だと考える。これによって「話す800」より下のクラスの活動を有機的に構築することができるだろう。更に、「話す」の授業の中では扱いきれないレジュメやメモ、最終レポートの書き方に関して「書く」クラスと連動するなど、他の技能コースとの連携も視野に入れて教材開発、授業実践を進めていきたい。

注

1．杉浦千里（2011）『日本語で発信』自主作成教材

2．インタビューに必要な語彙、表現を流れに沿って提示した。これに従って行うと一通りのインタビュー活動が練習できる。資料２～４も同様。

3．学生の国籍の内訳と人数は次の通りである。アメリカ６、韓国８、中国23、ドイツ２、キルギス１、ベラルーシ１、ウズベキスタン１、リトアニア１、エストニア１、カザフスタン２、ポーランド１、台湾２、ウクライナ１。

参考文献

桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」（2007）『自律を目指すことばの学習―さくら先生のチュートリアル―』凡人社

川口義一・横溝紳一郎（2005）『成長する教師のための日本語教育ガイドブック上』ひつじ書房

津村俊充・山口真人（1992）『人間関係トレーニング』ナカニシヤ出版